

「老いを生き、学ぶ」…私の場合…

竹島 政信

このチームで学ばせていただいて、改めて自分の老い先や老母の介護・往生際を、より広く、さらには客観視できてきているように思います。以下は、今の感想です。

自分の立ち位置は、ようやく公務から半ば独立でき、自分流の生き様を展開するチャンスができた。しかし、時間が無制限でなく、人生のロスタイムを心身半健康状態ながら、精一杯自分に与えられた潜在力を展開してから、この生を閉じることだと思っている。

私の母は、父が26年前に亡くなった後、一人で五箇山に住み、農作物をつくり、近所や親戚と親密に行き来しながら、90歳まで生きてきた。とうとう自分の排泄物の始末も手に負えなくなって、私と同居するようになった。一人暮らしでも、家の周囲に雑草を生えさせず、作物の出来具合はいつも近所から羨ましがられるほどに見事だった。近所同士互いに訪問しあって、珍しいものや美味しくできたものをやりとりしていた。それぞれの家庭事情や家族間の機微に驚くばかり通じていた。自分の技量への自信と周囲の人たちに待ち望まれているという自負を持っていたのであろう。自立自尊の生き様を、小学校しか出ていない母から学んだ気がする。

私は職業人としては大過なく、しかしもっとやれたはずなのに、との思いを残して、今求められるまま非常勤講師として、一種の自由業を生活している。非拘束時間を少しばかり手にした。職業人生では、手を出せなかった、やり残しをこれから少しずつやりとげようと考えた。一つは、学生時代に観た映画「黒いオルフェ」の主人公が、貧しいスラム街に育ちながら、なにかに魅入られたように練習を重ねて、リオのサンバカーニバルでグランプリを手にしたが、妬まれて殺されてしまう。その熱狂的で開放的な踊りとテンポに惹かれ、一度は観てみたかったので、リオの街へ行き、練習にもカーニバルのパレードにも夜が明けるまでつきあってきた。日本へ帰り、何かもの足りなく感じて、参加してみたのが富山市役所広報に出ていたヨサコイの講習会である。そういえば「ウエストサイド物語」のダンスも素晴らしかった。22歳での初任校が女子高校だった私には、踊りは別に抵抗なく入っていける芸だった。8月の富山まつりをメインに、シーズン中は週3日以上2時間の練習を続けてステージに立っている。8割が女性だが、全員が揃うことが少なくなってきた。いずれも残業時間が延びたことが理由となっている。なかでも男性は大幅に遅れてきたり、休んだりする人が多い。職場の劣悪さが偲ばれる。女性教師もいるが、いつも1時間近く遅れて出てきている。仕事や家庭を優先し、支障ない限り練習しましょうという原則だが、練習成果が結実しにくいのが実情である。こうして8年継続してきた。

二つは、ギターの練習である。現役教師時代から、カラオケでは単なる自己満足の域を出ない、下手であろうがそれはそれで、その人の情念や好みが透けて見えるので拍手をする。が、酔っ払ったときの気晴らしに過ぎない。白面で自己表現でき、また少しでも技量を上げていけるものはないか。尺八・三味線・ギターを当たってみたが、偶然「いきいき長寿財団」が初心者でもよいという、ギター教室を募集していたのを見つけ、参加してみた。練達の域にあるような人も2、3人いたが、たどたどしい人も2、3人いた。もちろん初心者の私が最悪だが、通信教育用のテキストも見ながら恥を忍んで厚顔を通した。たぶん通信教育の授業料を払い込んでいたこととリサイクルショップで買い取ったギターとが、簡単に諦めさせなかったのかもしれない。さらには、講師の先生が人格者だった。1度も間違いを非難されたことがなく、見本を弾いてくれて、私の指使いを手取り教えてく

れた。また駄目だった、と思うと同時にこの次までに何とか練習してこようと気を取り直してやってきた。とてもよい仲間にも恵まれた。同級生が2人いて、2人とも高校時代からギターに触っていた。1人はおわら節の胡弓もこなせる腕の持ち主だしバンドのグループを組んでいたこともあるという、他の一人は写真撮りのプロ級で写真以外の時間はいつもギターを弾いて心を癒しているという。彼らから学んだことの一つは、うまい奴ほど練習熱心、容易には追いつけない、ということである。他の仲良しの友(プラスバンド部顧問をしていた)に話したら、それを逆に読めば、練習すれば必ず上手くなるということだ、と指摘され納得した。まだ気が多くて、集中して練習を続けていない。月に2回の練習会には必ず出席し、ここ2年ほどは、病院やデイ・サービス老人ホームなどでボランティア出演している。元教員だから人前でしゃべることには慣れていると見込まれて、いつも司会役をこなしている。一番緊張するのが、富山市民芸術創造センターのホール祭で出演するステージである。

三つは、連合町内会の副会長(総務)をやり通すことである。個別の町内会では、住民体育大会や地元民踊を踊る盆踊りなどが、手に余る重責で専門的な知見や技量がないとやりきれない。9つの町内会を束ねて、各町内会長が発案し検討して決定する。同時に執行部として運営の一切を取り仕切る。その原案は私が考えて印刷し、会長と相談のうえ、各町内会長に提案して補充しながら、行事当日まで準備と参加者の確定をすすめる。一つの案として、小学校の子どもたちが夏休みラジオ体操にやってくるから引き続き、コキリコの踊りを教えてみることから始めた。3カ所で、それぞれ3週間、土日を除いてやっているのので、踊り練習も各会場で、4～5回やる計画を立てて実行してみた。残って練習していく子どもはいつも10人程度であった。しかし盆踊り当日になったら、子どもの他に年寄りが多い多数観に来てくれ、納涼祭も兼ねていたのでもって賑やかになった。コキリコの踊りは、割に単純な踊りの繰り返しなので母親も一緒に踊りに加わり盛会だった。次の年から、オワラ踊りを練習して当日踊った。この踊りは、かなりの技巧があるので、子どもたちをやる気にさせるのに苦労した。当日も、子どもたちは私のしぐさをマネながらたどどしく踊っていた。3年目の今年度は、もっと練習への参加者が少なくて当日は、私の周りに群がって踊り、とうとう輪を作れずに踊りを終わった。その代わりに、オトナでそれなりの自信ある人が一緒に踊ってくれたのがうれしかった。子どもたちは、お菓子などをもらい、ほぼ全員出てきていたようだ。この地域の子どもには誰でもコキリコとオワラが踊れて、この地域に愛着を持ってくれると期待しながらやっている。体育大会では、年寄りや年配の女性が走ったり、競技するのにとても抵抗がある。私が町内会長の時期にも苦労した。そこで、最下位でも相応の賞品を出す方針を決め、走りが遅くても出れば賞品が当たるルールにした。そのほか閉会式には、お楽しみ抽選会を設け、会場にいる人に限り20～30人に賞品が当たるくじ引きをやってみた。当選したのは、どの町内のどの人かと、互いが顔を覚えるのにプラスになることも期待した。要は、遠くの親戚よりも近くの他人、無縁社会にならず、隣近所が知り合い、軽く面倒をみあう横のネットワークでつながりあっている地域社会づくりに役立てば、私の努力もまんざらでもないと思っている。現役時代は地元を放ったらかさざるを得なかったのだから、これから少しでも恩返しにボランティアができれば、心穏やかにロスタイムの人生を終われるのではないかとと思っている。